

## 〔第12回大会公開講演要旨〕

## オウム世代の“こころの世界”とは？

武藤光朗

一般に青年期の人間は自分が何者であるかについて漠然と気がつきはじめ、その本当の自分と世間から与えられる自分の役割りやレッテルとの間に、葛藤や不一致があるのではないかという違和感に悩むようになる。

世の中が大衆化、情報化、都会化していくにつれて、そういう悩みをもつ青年期の人間の数がふえているが、オウム真理教にのめりこんで人生を狂わせてしまった信者たちの中にも、やはりそういう場合が多いのではないかと思う。

例えば、オウム真理教の犯罪の実行グループ指揮者として殺人、殺人未遂罪などで起訴されている井上嘉浩は、中学時代に次のような詩を書いている。

「願望、俺達は本当に幸せなのかな？／この世界、金さえあれば何もかも手に入ると考えている大人達／朝夕のラッシュアワーにしばられた中年、夢を失い、ちっぽけな金にしがみつき、ぶらさがっているだけの人生……  
／救われないぜ！　これが俺達の明日ならば……／逃げだしたいぜ、金と欲だけあるこの汚い人波から……／夜行列車に乗って」

また高校時代にはこんな作文も書いている。

「私はいつも仮面をかぶっている。私は人からほめられたいという思いから、自分はこうでなければならぬという仮面を見せる。仮面をはずした自然な生き方がしたい」

しかし井上嘉浩が逃げこんだ「別の世界」である教団・オウム真理教の内部は、魂の「解脱」という個人実存の最深のプロセスまでがハルマゲドン（世界最終戦争）への軍事戦略に組み入れられ、LSDや電極や強迫的シンボルの反復による彼の「身体」の技術的操作によって、「地球規模で行われるカルマ（業）の清算」に加勢する一因子として彼自身を機能化してしまうような、悪霊的な

闇の世界であった。

釈迦出現以前のインド原始仏教の破壊と創造の神、シヴァと自分を一体化する幻想の中で、麻原彰晃は新約聖書ヨハネ黙示録に描かれたハルマゲドンの「恐ろしいヴィジョン」に魅せられ、これを「地球規模で行われるカルマ（業）の清算」として受けとめていた。「あまりにも煩悩的になった地球人類は、やさしい顔をして法を説くだけでは救済されないだろう」「現代は恐怖の神々の時代であり、神は人工的な火を使ってカルマ落しをさせるだろう。それがハルマゲドンだ」と麻原彰晃は説いている。

シヴァ神の化身と自称する麻原はこの「恐怖の神」になりかわって、その神の激しい「怒りの裁き」を自分が執行すると思いがったのであろう。麻原は「すべての魂を救済したい。しかし時がない場合、それをセレクトし、必要のない魂を殺してしまうこともやむをえない」とまで言い切っている。

麻原彰晃の悪魔的・非人間的な自己神格化の倨傲の罪が、ここにきわまっていると言わなければならない。坂本弁護士一家殺害について、麻原が「悪業を積み、地獄に落ちてしまう人間の生命を断つのは立派な善行だ。（殺害された一家の長男、当時生後二歳の龍彦ちゃんについて）子供はより高いレベルに生まれ変わるだろう。悪業を積もうとしていた坂本弁護士に育てられずすんだからだ」と語ったような「狂気の悟り」は、こういう倨傲の罪に由来するのであろう。

リチャード・バックの『かもめのジョナサン』は、「くる日もくる日も食物の切れはしを求めて平々凡々に飛ぶことに何の疑問もなく生きているかもめの世界の限界を突破し、瞬間移動ができる本当の自分になろうと試みた」勇気ある若いかもめ、ジョナサンの物語りである。

美しい五木寛之訳のその日本語版（新潮社刊）が、1970年代の中ごろから、ポスト全共闘世代の学生たちの間でも広く読まれていたことを記憶している方も、少なくはないかもしれない。

1995年4月23日夜、“右翼”と自称する青年によって刺殺されたオウム真理

教最高幹部、村井秀夫もこの本に深く共感し、自分の心境をこれに託して両親にささげたあと、出家して教団へと去って行ったと伝えられている。

その村井秀夫もまた、オウム真理教の暗闇の中で鬼気迫る悪霊に変身してしまったのである。

1989年11月5日未明、新潟県名立町の林道から30メートル入った雑木林で、異様な光景がくりひろげられていた。そこでは村井秀夫が、殺害された坂本弁護士遺体の顔面をツルハシで黙々と打ち続けていた。「歯があると、発見された時に身元確認の手がかりになる」から、その証拠を消そうとしていたわけである。月明かりの下、普段と同じ能面のような表情で村井は作業していたという。

この村井秀夫の変身について、国際日本文化研究センター助手の森岡正博氏が平成7年7月19日付、東京新聞夕刊掲載のエッセイ「世界は科学で割り切れない——なぜ彼らが宗教にジャンプしたか」の中で、非常に示唆的なことを書いている。

本日の私の主題とも深くかかわっていると思われるので、その一部をここに紹介させていただくことにする。

森岡氏はこう言うのである。「私は、殺害されたオウムの村井氏と同年（三十六歳）である。麻原教祖が四十歳、幹部や実行部隊はほとんど三十代から二十代。私も含むこの世代の、科学との出会い方には、それ以前の世代とかなり違ったものがある」。

というのは、森岡氏が高校生になった1974年当時、科学は大きな転換点を迎えていたからである。ローマクラブのレポートなどの発表によって地球環境危機が叫ばれ、遺伝子操作の技術が確立されて「生命の神聖」の冒瀆が憂慮され、スリーマイル島の原発事故によって巨大技術の安全神話が崩れるなど、要するに、当時「科学はすでに薔薇色の未来を約束するものではなくって、むしろ人類を破滅に導くかもしれないもの」として姿を現わしていた。だから森岡氏は「オウムが説く人類の滅亡（ハルマゲドン）は、私の世代が思春期に持った共通の世界観である」とまで言い切っている。

森岡氏は科学者になるつもりで大学に入り、とくに素粒子物理学に興味があ

って、その道に進もうと考えていたが、「生と死」の問題に科学は答えてくれないことがわかり、激しく悩んだ末、進路を変えて文学部に転部し、哲学・倫理のコースを選んだという。だから森岡氏は、こう訴えかけるのであろう。「私は殺害された村井氏のことを他人事とは思えない。彼もまた宇宙物理学を学んでから、突然オウムへと入っていった。村井氏も私も、サイエンスの道を進む途中で大きな疑問にぶつかって、そして《こころの世界》へとジャンプしてしまったのである」。

1970年代の中ごろから80年代初めにかけて、私は早稲田大学文学部の「社会思想」という講義と演習を通じて、学生諸君との交流があった。当時テキストとして使っていた私の著書『革命思想と実存哲学』（創文社刊）のテーマは、現代の高度工業化社会における無常感と貨幣愛から始まって「本当の自分探し」を続け、最後に、原爆・全体主義・地球環境破壊を「終末の象徴」とするようになった科学的・技術的時代の、「限界突破」の道を探るということであった。そういう事情もあって、森岡正博氏の場合とは違った意味においてはあろうが、私もまた、オウム世代の人びとのことが「他人事とは思えない」のである。

“こころの世界”へ生死を賭けてジャンプしようとするオウム世代の人びとの運命について考える時、私はカール・ヤスパーズが1952年、『哲学』日本語版に寄せた「原著者序文」の中の次の一節を思い出さずにはいられない。

「あらゆる形の暴力と虚偽が、今日信仰を喪失するにいたった多くの人びとの心を捉えているようにみえる。……このような人びとは何ものかを信じようと望んでいる。しかもそのものが真実なものではないということ、実際は彼らは自分で知っているのである。彼らは、彼らにとって力あるいは権力であるとともに、とにかく未来における漠然とした善であるところのものに奉仕するために、自らを虚偽へと強制する」。

オウム真理教の暗闇を、「生と死」の問題に答えてくれる別の“こころの世界”と思いこんでその中にジャンプし、その悪魔的・非人間的教義によって悪霊に変身させられたオウム世代の若者たちの悲劇的運命を予感していたかのような、哲学者の憂いにみちたまなざしが、ここには感受される。

そしてそこには、次のようなメッセージも書き残されているのである。

「今日地球上のいくつかの個所ではすでに現実となっている未来の禍いからくる脅威に反抗する諸々の力が強められなければならない。……かの禍いはすべての人間一般を終熄させてしまうことなく、むしろ人間は何らかの形で生き残るであろうから、そのとき哲学は、人間的な交わりの中で理性と愛の気持ちをもって思索する人が生き続けるための装備をもち得るように、助けてやらなければならない」。

ヤスパースの『哲学』全三巻の中には、「限界状況における自己直視の思想」など、オウム真理教の暗闇に光を投げかけ照破するような、多くの暗号的言葉がちりばめられている。井上嘉浩や村井秀夫が入信前にこれを読んでくれたら、と惜しまれてならない。

(社会思想家)